

平成26年度 県小教研学習指導改善調査【結果分析】第4学年国語

1 調査結果の分析

(1) 資料選択について (①～⑦)

ア 資料を読み取る力・・・(①～④)

正答率は、①は91.8%、②は76.5%であった。昨年度の4学年の同項目で①が70.1%、②が60.4%であったことから考えると、インタビューの内容を正しく読み取って、前後の文脈から適切な選択肢を選ぶ力が着実に付いてきているといえる。

逆に、③と④に関しての正答率は、昨年度より5%以上低い。③は60.4%、④は58.7%である。誤答の要因として挙げられるのは、問題文をよく読まずに回答してしまっていることである。「メモの記号を《取材メモ》ア～エの中から選んで」と書いてあるにもかかわらず、「病気になるなくふう」「土作りのくふう」と言葉(小見出し)で書いてしまっている誤答が多く見られた。取材メモ、組み立て表、紹介文と3つの資料を見比べて回答しなければならないことも誤答が多くなった要因と考えられる。

複数の資料を読みこなし、問われていることに正しく答える力を確実に付けていく必要がある。

イ 資料を活用する力・・・(⑤)

正答率は67.1%である。「資料選択」の問題の中では無答率が4.4%と高いため、活用する力が身に付いてきている児童がいる反面、どの資料のどの部分を参考にして書いたらよいか分からない児童も少数ではあるが、いることが分かる。③段落が取材メモのアに対応していることに気付くことが正答につながる。どの段落がどの取材メモを基にして書かれているのかについて、資料を読み取る力を付ける必要がある。

ウ 話題に沿って必要な事柄を選択する力・・・(⑥⑦)

正答率は⑥は82.8%と資料選択の中では、2番目に高い結果となっているのに対し、⑦は49.5%と1番低い結果となっている。

⑥は、自分が選んだ内容に合ったメモを選択する問題である。アの資料を読み取る力の設問で、三つの資料を見比べながら回答するものに関しては正答率が低かったが、⑥のように見比べる資料が二つまでであれば正しく資料を読み取る力が付いていることが分かる。

⑦の誤答としては、「他の取材メモを使わなかった理由を書きましょう。」と問われているのに、自分が選んだ取材メモについて使った理由を書いてしまっているもの、「使わなかった理由」という言葉の意味を理解できず、感想を書いてしまったものなどが挙げられる。

アの③④と同じで、問われていることに正しく答える力が不足していると考えられる。また、普段の学習の中で、取捨選択したメモの使わない理由を問われた経験が少ないことも正答率を下げる要因となったと考えられる。

(2) 記述問題について (⑧～⑪)

ア 全体の構成を考えて記述する力・・・(⑧)

正答率は34.8%で、全設問の中で最も低い結果となった。誤答として1番多かったのが、「始め」と同じことを「まとめ」で書いてしまっているというものである。紹介文を書くという経験が不足しているために、「まとめ」には何を書いたらいいのか分からなかったのではないかと考えられる。国語の時間に紹介文を書く回数はそれほど多くない。社会や総合的な学習などで紹介文を書く時に、「まとめ」の内容は「始め」と対応して書くということ、「中」の内容を受けてまとめるということの二つを意識

して指導することが必要である。

イ 時間内に指定された文字数で文章を記述する力・・・(⑨)

⑨は、指定された文字数以上で文章を書こうとする学習意欲と、実際にどのくらい書けるかという技能をみとることができる設問である。正答率は 79.3%である。昨年度は 79.9%と昨年よりわずかに正答率が下がっているが、これは今年度指定字数が 20 字程度増えていることから考えると妥当な数値と言える。記述問題の中では無答率が 1 番低く 7.3%となっているが、全く書けなかった又は、指定字数まで書けなかった児童に対してどのように書いたらよいのかについて具体的な指導が必要と考える。

ウ 段落を意識して記述する力・・・(⑩)

⑩は、「始め（紹介すること）・中 1、2（工夫 1、2 及びサービス 1、2）・終わり（まとめ）」の 4 段落構成で記述する力と、段落ごとの書き出しを 1 字下げで書くという基本的な力が要求される設問である。どちらか片方だけでできていても正答にはならないため、正答率は 54.3%と低めである。

誤答としては、一字下げで書くことができなかつたものが 1 番多く挙げられる。昨年度の 5 学年においても、一字下げができず文章を書き連ねてしまう誤答が見られるし、数はかなり減少するものの 6 学年においても同じような誤答がまだ見られる。段落指導において基礎的・基本的な事項であるので、確実な指導が望まれる。

次に多く見られた誤答としては、4 段落で構成できないというものである。低学年の時に「始め・中・終わり」を意識して 3 段落で構成した文章を書くという経験を積んでいると、中学年で中を詳しくして 4 段落で構成することに抵抗が少ないと考えられる。中学年になって急に段落を意識し始めるのではなく、低学年のうちから文のまとまりとしての段落意識を育てていくことが必要と考えられる。

エ 資料を活用して書く力・・・(⑪)

⑪と同じく、正答率は 54.3%と低めになっている。⑥で適切にメモを選択できなかった場合も、⑨で指定文字数以上書くことができなかつた場合も誤答になるとはいえ、低い数値である。自分が選んだ取材メモを使って第 2・3 段落を書けばよいのだが、誤答としては、メモにないことを付け足したり言葉や文を書き換えてしまったりしているものも多く見られた。紹介文と生活文との区別ができておらず、メモに対して自分の感想を書いてしまったものも誤答として挙げられていた。

生活文よりも、紹介文を書く経験は少ない。そのため、自分の感じたことや思ったことを書いてしまった児童が多かったと考えられる。中学年では、社会科や総合的な学習で見学や取材に行き、メモを書いて、それを文章化するという活動が多くある。そのような活動の中で、具体的に書き方の指導を行うことで、資料を活用して書く力を付けていくことが期待できる。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語の学習で

- 三つ以上の資料を見比べながら、適切な内容で文章を書く機会を設定すること。
- 段落書き出しの一字下げなど、基本的な原稿用紙の表記のきまりを守って文章を書くこと。
- メモや資料をもとに「始め・中・終わり」の構成を意識して文章を書くこと。その際、「終わり」がまとめになるような構成の文章を書く経験をもたせること。

(2) 他教科や総合的な学習の時間で

- 複数の取材・見学・観察メモや収集した資料を基に、文章を書く経験を多くもつようにすること。

1 調査結果の分析

(1) 資料選択について (①~④)

ア 本文と資料を関連付けて読み取る力・・・(①)

①は、【話し合いの様子】での立場や意見の根拠となる資料を読み取る設問である。正答率は70.8%であった。誤答の傾向としては、石田さんの「問題が起こりやすい休み時間に注意するのは大切」という考えの根拠(ア)に対し、資料1の「事故が起こりそうな場所」を選択したものが多かった。これは、資料の理解が不十分のまま「問題が起こりやすい」と「事故が起こりそう」を混同して関連付けたことが原因として考えられる。根拠(ア)根拠(ウ)に比べ根拠(イ)の誤答が少ないのは、「だれも見えていないと守れない人が六十人以上いる」という小嶋さんの発言と資料3の「見えていない」「六十四人」の関連付けが容易で、内容の理解が不十分でも選択できたためであるにとらえることもできる。キーワードを見付けるだけでなく、資料の内容を十分理解した上で本文と関連付ける必要がある。

イ 叙述を整理して、本文を読み取る力・・・(②③)

②③は、A案B案について問題点を読み取る設問であり、正答率はそれぞれ83.8%、84.2%であった。A案B案ともに、問題点を指摘する前に「ぼくは、B案に反対です」などと自分の立場をはっきりさせている文があるため、比較的迷うことなく読み取ることができたのではないかと考えられる。

ウ 話し手の意図を正しくとらえる力・・・(④)

問題点と解決策との組み合わせを選択する④の設問は、正答率が60.1%であった。設問の意図は【話し合いの様子】中にある四角囲みの「問題点」と「解決策」に入るものを選ぶというものであった。誤答理由の多くは次の2点である。

- ・ A案の問題点である「忘れてしまう」ことを選ぶことはできたが、それとは整合しない「落ち着いて行動する」等の解決策を選んでしまった。
- ・ 設問の意図を理解せず、安易にB案の問題点である「委員の休み時間がなくなって大変だ」と「カラーコーンを置く」という解決策の組み合わせを選んでしまった。

設問の意図を正しく理解し、問題点とそれに整合する解決策を読み取り、その組み合わせの番号を見付けるという作業の中で混乱してしまった児童の様子が見えてくる。大切な文や言葉に線を引いたり、メモしたりするなど確実に読み取るための方法を工夫する習慣を付ける必要がある。

(2) 記述問題について (⑤~⑩)

⑤~⑩は、読み取ったことを基にして、自分の考えを論理的に記述する設問である。指定された文字数に達しないと⑤が誤答、⑥以下がすべて無答となる。

ア 制限時間内に指定された文字数で記述する力・・・(⑤)

⑤は、指定された文字数以上で文章を書こうとする態度と実際にどのくらい書けるかという技能を見取る設問である。正答率は78.6%。昨年度4学年時の同項目が80.1%、昨年度の5学年が89.4%であったことを考えると少し物足りない数値である。誤答のほとんどは、規定の字数に満たないものである。条件である「自分の体験」や「実行したらどうなるかの予想」等を文章中に取り入れることができなかつたために、字数が足りなかつたことが想像できる。必要な内容を盛り込みながらも、決められた字数で文章を書き切る指導が大切になる。

イ 段落を構成する力・・・(⑥)

正答率は60.2%、誤答率は20.7%であった。設問中に段落の作り方や例文が提示されているにもかかわらず、条件を満たさず段落を構成できない誤答が多かつた。これは、普段の作文における段落意識の欠如や、効果的な段落構成についての理解の不足が考えられる。

また、提示された文章を活用して自分の文章に生かすことができないともいえる。良い

文やその構成を真似て、自分の文章を見直す等の経験が必要であろう。

ウ 自分の立場を明確にして記述する力・・・(⑦)

正答率は 79.5 %。誤答率が 2.4 %という点からも、第 1 段落で立場をはっきりさせてから文章を書くということに慣れていることがうかがえる。また、【話し合いの様子】で常に「A案に賛成です」「B案に反対です」等の表現が用いられていることも、自分の立場を明確にして記述できた要因と考えられる。

エ 理由を明確にして記述する力・・・(⑧)

正答率は 62.6 %。理由は書いてあるものの整合していない、あるいは理由としては弱く不十分であると思われる誤答が多かった。これは、自分の立場を決める際に、資料から得た情報を十分に整理できていないことが原因として挙げられる。そのため、それぞれの案に対する賛成理由が間違っていて理解されたり、より有効な理由を見付けられなかったりしてしまうと推測される。資料に線を引いたり記号を付けたり、必要があれば表にまとめて一覧にしたりするなどの工夫をすることで、より確かな理由を記述できるようになると考えられる。

オ 理由に説得力をもたせて記述する力・・・(⑨)

正答率が 46.3 %であった。いろいろな条件を踏まえながら、自分の体験を入れて文章を書くことが難しかったようである。廊下歩行については、自分たちの学校でも起こりうる問題であると思われるが、自分の経験を想起したり実際にやってみたらどうなるかと仮定的に思考したりすることに弱さがあると考えられる。また、経験を思い出しても、本文中にどのように記述すればよいか分からない児童もあったと思われる。相手に自分の思いや考えがより伝わりやすくなるために、自身の体験や仮定した話を入れて表現をする習慣を付けていくことが大切である。

カ とらえた問題点について、自分の考えを記述する力・・・(⑩)

正答率が 52.6 %であった。自分の賛成する立場の問題点をあえて示してその解決策を述べるという、いわゆる「論じ返し」の記述ができていない児童は、まだ多くないといわざるを得ない。誤答の多くは、本来自分の立場の問題点を示すべきところを、相手の立場の問題点を示していた。これは、自分の賛成する立場の問題点を用いることで、逆に説得力が増すということが理解できていないと考えられる。問題点とその解決方法を示すことで、反対の立場の人が納得しやすくなるということを経験させる必要がある。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語科の学習で

- 段落意識を明確にして、段落と全体との関連をとらえながら文章の要旨を把握すること。
- 資料から自分に必要な情報を収集し、分類・整理して、自分の考えを明確にすること。
- 意見文の基本的な構成や文末表現を模倣しながら、自分の考えを的確に記述すること。
- 普段から原稿用紙の表記のきまりを意識し、原稿用紙（またはマス目のあるノート）を用いて書くこと。

(2) 他教科や総合的な学習の時間で

- 図や表、写真などの非連続型テキストから、情報を取り出し、分類・整理すること。
- 物事を多面的にとらえたり、自他の考えを比較して共通点や相違点に着目したりしながら、考えの良い点、改善が必要な点等を考えること。
- 相手に自分の考えがより伝わりやすくなる方法を理解し、話し合い活動や自分の意見を記述する活動で活用していくこと。

平成26年度 県小教研学習指導改善調査【結果分析】第6学年国語

1 調査結果の分析

(1) 資料選択について (①～④)

ア 資料を読み取る力・・・(①～④)

①の正答率は69.2%であった。資料ア～カを読み、資料からは「分からないこと」を選ぶ設問である。誤答の傾向は二つあり、一つは「分かること」を選んでしまう、もう一つは選択肢②の「6月にもホテルを見ることができる。」や、選択肢⑤の「カワニナが減ると、ホテルも減る。」を選んでしまうというものがあった。

どちらの誤答も資料の読み取りが不十分であることが要因と考えられる。選択肢②の場合では、資料アの中に「5月下旬から7月にかけて羽化」とあり、選択肢⑤の場合では、資料オの「ホテルが減った理由」の中に「カワニナが減ったこと」とあり、選択肢と全く同じ文ではないが、事実関係を推測するための手掛かりが書かれている。しかし、資料を正しく読み取ることができなかつたために、それらの手掛かりに気付くこともできなかった児童が多かった。

②の正答率は86.9%と高かった。上記の設問①のケースとは逆に、資料アの中に「幼虫のときは水の中で育ち」という穴埋めの部分とほぼ一致する文があり、考えやすかったと思われる。

③はベン図を使って情報を整理・分類する設問であり、正答率は77.3%であった。問題文の中に「共通点が分かりました。」という記述があり、ベン図を知らない児童でも[B]の部分には資料ケと資料コとの共通点が入ることが予想できたと思われる。誤答の中には、回覧板と看板により地域に呼び掛けたりお願いしたりすることを共通点ととらえ、「呼びかけること」と書いたり、生活排水を流さない、ごみを捨てない、ライトで照らさないなどを一括りに考えて「マナーを守ること」と書いたりするものが見られた。どちらも、取材メモの項目を整理・分類したという意識が低く、自分なりの共通点探しをしてしまったことが要因であると考えられる。

④の正答率は40.6%、誤答率55.4%と本調査の中で最も正答率が低い設問であった。誤答の多くは、グラフの推移を2007年から2012年までを全体的に右下がりのグラフととらえ、概ね減少傾向にあると判断したものであった。そのため、「ごみが減ってきている。」と書いてしまい、毎年25kg以上のごみが出ていることや、最近ではあまり減っていないことに気付くことができなかった。他にも、一文で書くという条件に合っていなかったり、次の文に続く形で書いてしまったりという誤答も見られた。

(2) 記述問題について (⑤～⑧)

ア 制限時間内に指定された文字数で意見文を書く力・・・⑤

正答率は91.6%と非常に高かった。昨年度の5学年時でも同項目で正答率が89.4%と高く、資料を基にして、指定された文字数以上で文章を書く力が高まってきていると考えられる。また、無答率も2.5%であり、文章を書こうという意欲も高いことが分かる。今後は、指定の文字数に達しなかった児童(誤答率5.9%)、全く書けなかった児童(無答率2.5%)への指導を考えていく必要がある。

イ 段落を構成する力・・・⑥

正答率は77.8%であり、5学年時の同項目では正答率が66.1%で、昨年度の本調査では最も低い設問であったが、今年度は11.7%の上昇となった。設問も変わっているので単純に上昇と捉えることはできないが、「始め、中①、中②、終わり」の構成で文章を書く力が付いてきたと考えられる。誤答（誤答率15.5%）の中には、一字下げや改行ができていないというものが依然として多かった。また、段落分けができていない児童は、内容も不十分であるという傾向も見られた。

ウ 理由を明確にして記述する力・・・⑦

正答率60.2%であった。この設問は、意見の根拠となる資料を複数選択し、「資料○にあるように～」という文型で、理由から分かることを自分の意見にかかわらせて記述する設問である。誤答率が29.7%と約3割の児童にあたり、誤答の傾向は二つあった。一つは、「資料○にあるように～」という指定された文型を用いるという条件を満たさなかったものである。これは、問い五の条件③で示された、「二つ以上の資料」と「記号を入れましょう。」という二つの条件をきちんと意識して意見文を書けなかったことが要因であると考えられる。もう一つの傾向は、選んだ資料が看板を作る理由として整合していないというものである。これは、資料の読み取りが不十分であるため、自分の考えを主張するためにはどの資料を選択すればよいのかという、資料を活用する力が不足していると考えられる。摘読により、それぞれの資料の大まかな内容を読み取るという経験を積ませていくことが必要である。

エ 理由に説得力をもたせて記述する力・・・⑧

正答率は69.8%であった。この設問は、資料で表されている数値や言葉から分かることだけでなく、自分なりの解釈や意見などを加えて記述するというものである。誤答の多くは、資料から分かることの記述にとどまっているものと、その逆に自分の意見だけを述べているというものであった。資料から分かる事実とその根拠となる数値や言葉を加えて述べる力は付きつつあると思われるが、自分の考えまで付け加えて述べる力をさらに育てていく必要がある。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語科の学習で

- 説得力のある文章を書くために、構成メモを活用して双括型の文章表現を身に付けさせること。
- 表記のきまりを意識して原稿用紙に書くこと。
- 教科書や資料にある数値や言葉を根拠にするだけでなく、自分の解釈や意見を付け加えて述べる経験を日頃から繰り返すこと。
- 記述問題で無答の児童を減らすために、書いて伝えることの楽しさや喜びを感じられるような活動を経験させること。

(2) 他教科や総合的な学習の時間で

- 思考ツールを活用し、情報を整理・分類したり、多様なものの見方の中から共通点や相違点を見出したりすること。
- 表やグラフなどの非連続型テキストから情報を読み取り、事実や数値から分かることを基にして、その因果関係を考えたり、推移を予想したりして自分の考えをもつこと。